

盛唐小説論

著者	内山 知也
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	1
ページ	68(55) - 90(33)
発行年	1977-03
その他のタイトル	Tales in Mid-Tang
URL	http://hdl.handle.net/2241/13798

盛唐小説論

内山知也

一 まえがき

私は「初唐小説論」⁽¹⁾において、唐の高祖から高宗におよぶ、六一八年から六八三年の間の小説について概説した。本論は、その後を承けて、中宗より睿宗・玄宗・肅宗を経て代宗の初期に至る、六八四年から七六五年の八十一一年間の小説を概観しようと思う。

この時代分割は必ずしも合理的に決定したわけではなく、一応の仮の区切りにすぎないことを明らかにしておく。何となれば、私が本論において最初に取扱う張鷟の「遊仙窟」は、大体、儀鳳二年（六七七）より永隆元年（六八〇）ころの唐吐蕃戦争を背景とした物語であり、制作年代もほぼそのころと思われるので、上述の私の時代分類によれば初唐末期に相当する。けれども、それは後の張鷟の作品「朝野僉載」との関連において考えなければならぬから、盛唐小説と見なし、あえて自分の時代区分を破らなければならないのである。また、戴孚の「広異記」も大体開元・天宝・乾元・広徳期の説話を収めていて、盛唐の背景のもとにある説話集であるが、なおわずかの大暦（七六六―七七九）初の記事もあるために、中唐小説に所属させなければならない。

したがって、本論において叙述が時として初唐期に遡上することも海容いただきたい。

この時期は、則天武後の専政から始まる。十四歳で太宗の後宮に入つて才人となつた武氏は、太宗の歿後、高宗に愛されて再び後宮に入り、皇后王氏、蕭淑妃を殺し、皇后の座をかちえた。その後次第に権力を伸張し、上元元年（六七四）自ら天后と称し、すべての政權を掌握した。そして諸儒を内殿に招き、「列女伝」「臣軌」「百寮新誠」「案書」などの書を撰定させた。

「新唐書」芸文志雜伝記類女訓の項に、「武后列女伝一百卷。又孝女伝二十卷」とあるのが、その「列女伝」である。その巻数の膨大なことは、劉向「列女伝」十五卷、皇甫謐「列女伝」六卷、葛洪「列女伝」七卷、劉向「列女伝」八卷、趙母「列女伝」七卷、項宗「列女伝」十卷など、一連の「列女伝」の巻数をはるかに抜くものであり、杜預「列女記」十卷、虞通之「后妃記」四卷はもちろん、唐の長孫皇后「女則要録」十卷、魏徵「列女伝略」七卷に比べても格段に浩瀚なものであつた。おそらく古い劉向らの「列女伝」を参考にし、武後の女徳を尊崇するために、儒者たちによって編集せられた貞節な女性の逸話を集めた教訓說話集であつたのであらう。この書は現在伝わらない。

武后はその治政の末年、聖曆（六九八—六九九）年間に、姚士廉らの作つた「文思博要」（一千二百卷、貞觀十五年奉獻）などの類書の不備を感じ、寵愛していた張昌宗に命じ——彼と自分との醜聞を群臣の目から隠す目的もあつて——「三教珠英」一千三百卷の撰集に当らせた。その膨大な類書は大足元年（七〇一）に完成した。編集に集まつた二十六人の学者たちの中には、李嶠・沈佺期・陳堅・張説・劉知幾・宋之問・崔湜・富嘉謨らの詩人・政治家・史学者がいた。彼らは、「文思博要」に欠けている宗教上の諸項目や、親屬・姓名・方域などの系譜学・地理学上の成果を加えた。これ以後、唐朝全般に亘つて、これ以上の膨大な類書の出現を見なかった。

武后にはこのように、説話集の編集や、類書の編纂に意を用いる心があつたのである。

武后の歿後、中宗の復位は成功したが、今度は彼の皇后韋氏の専權が続くことになった。この時、宮中には修文館が置かれ、多くの宮廷詩人たちがここに集められた。ここでは昭容上官婉兒が詩文の判者となつて優劣が競

われ、宮廷詩が大いに栄えたのであった。まもなく韋后は安樂公主と謀って中宗を毒殺し、政權を握ったが、まもなく相王(睿宗)の子隆基(玄宗)のクーデターにより殺され、時代は皇太子隆基の権力の方向へと新しい展開を見るに至る。隆基はさらに対立者太平公主を斃し、睿宗から讓位されて即位する。

こうして玄宗の開元(七一三—七四二)天宝(七四二—七五六)の隆盛期を迎えるに至る。この時期における詩壇の隆昌は中国詩史上最もはなはだしいものであったことは、ここであらためて言うまでもないことである。天宝期にはまた楊貴妃とその一族が榮華を擅にし、やがて安祿山、史思明の大乱を惹起する。この騒乱によって唐王朝は瀕死の打撃を受けたばかりでなく、官僚人民のことごとくが塗炭の苦しみを受けたのであった。この大乱を境にして、地方藩鎮の勢力は増大した。多くの知識人たちは紛争の続く中央から離散し、これらの藩鎮の首府や地方都市に住む者が多くなり、宮廷詩壇は壊滅した。そして新しい個性的な詩人が地方から生まれはじめたのであった。詩人と同様に小説の作者もまた中央から地方へと分散するのである。

この時代に生きた文学者たちは、三度にわたる後宮の権力闘争と女性の専權に悩んだのであり、彼女等に協力した酷吏や高官たちの醜惡な生態を見たのである。一方吐蕃・突厥・党項など辺境諸民族との戦闘は初唐と同様に依然として継続していた。特に安史の大乱後、西方及び河北藩鎮の動乱は、次の中唐中期に及んでもなお鎮靜の期を得ないほどだったから、小説の作者もまた多かれ少なかれ異民族との戦いや、内乱に影響されたのである。例えば、先にあげた張鷟は初唐末に吐蕃との交戦地域に赴いたし、則天武后期の恐怖政治に奉仕した酷吏たちの生態も觀察していた。そうした体験や、その中での聞見を、彼の説話集「朝野僉載」に記録している。

この時代において、「小説」はどのように考えられていたかという問題について、述べるべき資料は甚だ少い。開元七年(七一三)九月、玄宗は麗正殿に四庫の書物を筆写させ、庫ごとに目録を作らせた。⁽²⁾その際において、諸子と小説をどの分野に所属させるべきかの問題が生じた。そのときの対策文に、「京兆耆旧伝」⁽³⁾は何時代から始まったものか、「陳留神仙伝」は誰が創作したものか、「老子図」は誰が最初に画いたものか、「逸人之記」は誰が最初に書いたかなどについて質問を受けている。「京兆耆旧伝」「陳留神仙伝」は逸書で現在伝わらず、経籍

志・芸文志にも見えないし、「孝子図」・「逸人之記」も具体的にどのようなものを指したか明らかでないが、考えられることは、こうした文献図面の整理に当って、かつて班固も困惑したように、これらを七つの目録学上の分類に入れることができず、処理に困っていたと思われる。こういう質問に対して孫嘉之は、戦国諸子以来の雑書について、

……諸子や小説の微妙な言論は、それぞれに内容こそ違つてはいるけれども、ちよつとした人民の説話から政治に有益なものを発見したり、仁義の行為を果した人を顕賞したり、政治法律を包括したり、国家を富ませたり、勦善懲惡の効果を期待することができ。こうしてそれらは国家や人間自体にとつて有益なものであり、実に翰墨の源泉・文章の隆藪であるといつてよい。だから司馬遷は「史記」においてこれらを九流に分類したし、班固は「漢書」において七略に著録した。現在それらを削つてしまおうという議論が起つてゐるが、そういう行為は、学者の多聞を絶ち、国家の広略にそむくことになり、私としては賛同しかねる。

と答えるのがその要旨である。

この対策は、墨子・儒家・文子・范蠡・孫武・蒙叟（莊子）・葛洪・劉安・楊子・鄒衍・商子・尹文子・呂不韋・鬼谷子を正式な諸子の中に入れ、それ以外の雑多なものについても、その意義を訴え保存を主張しているのである。その中で具体的質問のあつた「京兆耆旧伝」「陳留神仙伝」のような雑伝記を何に所属させるかという件についての解答はない。ひたすら、小説もまた政治に有益であるという班固以来の旧説を称えて保存を主張する。諸子の一派として小説を考え、それは小道ではあるが、人民の声を反映し、政治に有益なものであるというふう（1）に規定する答弁は、「漢書」芸文志の解説から一步も出ていないことを示している。そして、いみじくも、この対策文は諸子の分類には包摂しきれない、耆旧・神仙・孝子などの説話をどの部類に入れたらよいのか、という現実問題の発生について、古い目録学の知識しか持たない孫嘉之にはまともに答えられなかったということを暴露している。

この一つの資料から推しても、この時代の目録学の上には、まだ「小説」の概念は明確ではなく、諸子のおち

こぼれをそう仮称したにすぎないと思われる。

しかし、一面において、漢魏六朝以来、雜伝記や説話集逸話集が編集されて現実に存在し、それをどのような目錄学上の分野に整理するか、既に「隋書」経籍志に著録されたものはよいとして、それ以外のものはどう処理するかという問題が起っていたのである。短い説話、逸話の記録が、目錄学上の落ちこぼれである以上、それらを「小説」の名を冠して一まとめにしまえば目錄学者の用件はすんでしまいうわけであるが、なおそこに入れるのに躊躇される神仙伝や耆旧伝のような雜伝に関する問題があったと見られる。

盛唐天宝年間の人劉餗は、「史通」の著者劉知幾の子であったが、彼が「伝記」という小説集を書いたことは有名である。現在「伝記」は「太平広記」にわずかに散見するのみであるが、別に「隋唐嘉話」と題する説話集が伝わっていて、作者に彼の名が冠せられている。これがそのまま「伝記」であるかどうか、なお考証を要する問題であるが、その序によると、

私は少年時代から、昔の話をたくさん聞いてきたが、大典に記すほどのことではないから、小説の末に書き記すのである。昔、漢の文帝は先帝のきめられたことを変えなかったので天下がよく治まったという。高宗が乳母盧氏の願いを拒絶したのも先帝の決定に従ったことで漢の文帝の行為に近い。漢の曹參が役人を選任する時には、弁舌の巧みなものを用いず、おっとりとした長者を用いたという。馬周が太宗に上書して、その意見がすべて用いられたのは、何と曹參と異っていることだらう。許敬宗が（征遼の役に飛梯の先登を）命ぜられて拒否したのは、言うべきでないことを言ったのである。仏教が応報の道理を説いていることについて、私はかつてそのままにして論じたことはなかったが、解奉先が牛に生まれかわったことなどは、そのはつきりした現われではないか。友人の天水の趙良玉が実際に私に話してくれたから、その異常なことを書きとめたのである。

とあって、明らかに編者劉餗は、歴史的逸話や仏教説話などを小説と考え、そうした小説をまとめて「伝記」（または「隋唐嘉話」と名づけたのである）。

中唐の中期ころの李肇の「唐国史補」の序に至ると、

……昔、劉餗は南北朝から開元年間までに渉る小説を集め、「伝記」を著わした。私は開元から長慶に至るまでの小説を集めて「国史補」と名づける。歴史家がもし欠いていれば補ってやろうという気もあり、「伝記」が記していないものを続けたい気もある。報応・鬼神・夢卜・閨房のことは除外し、事実を記し、物理を探り、疑惑を弁じ、勸戒を示し、風俗を探り、談笑を助けるものは、これを書いたのである。

と言っているから、このころにも、報応・鬼神など仏教・道教の説話を記録することは小説の行為であるといった考えが継続的に認められていたのである。

盛唐期には、孫嘉之の場合のように、国家の圖書編纂に関連する目録学の立場では、「小説」の概念は依然として諸子の余りものであったが、実際に史官の立場にあり、歴史の記録に携わっていた劉餗には、歴史の余りを「小説」と考えるという、二つの立場があった。そして、後者にはなお民間説話の記録も含まれていたのである。

二 異国趣味と小説

玄奘が国禁を犯して印度にわたり、十七年の旅を終えて帰国したのは、太宗の貞観十九年（六四五）であった。それからまもなく、六四七年以降三十年ほどの間、唐は北方の回紇・突厥の諸族を制圧してシベリヤ南部に至るまでの通商路を開いた。西方では吐谷渾・突厥・西突厥を抑えて、東部天山地方に伊州・西州・庭州の直轄領を作り、西部天山の碎葉城に至るまでの地域を、六七九年から四十年間、安西都護府の支配下に置いた。朝鮮における安東都護府の設置、ベトナムにおける安南都護府の設置は、同様に東方と南方への拡張であった。

こうした範囲の拡大にともない、多くの異民族の文化が中国に流入して影響を与え、また中国文化は諸国に浸透していった。玄奘のように中国人がそれらの国々に出かけていっただけでなく、外国人が中国を訪れ、また新羅僧慧超のように、中国を通じてインドに赴き、もどって行った者さえある。

陸路だけでなく、海路も、遠く西はイスラム教主国に、東は日本にまで及んだ。

玄奘は彼の壮大な大旅行のあと、洛陽において太宗に逢い、国禁を犯したことを許されたばかりでなく、壮途を慰勞され、西方諸国の状況について親しく質問を受けた。そして、彼が経巡った国々の方志を書くことを命ぜられたのであった。早速勅許によって玄奘は全国から優秀な僧侶を集め、彼が持ち帰ったノオト(志記)や資料をもとに、「大唐西域記」十二巻を作制した。時に貞観二十年(六四六)であつた。特にその任に當つたのは長安の会昌寺から玄奘の所に参じた綴文の大徳弁機であつた。その方志は、彼の旅行の途次経過した国々の人文地誌、歴史風習の記録のほかに、仏教遺跡と伝説說話を記録した。しかもその記述形式は彼が訪れた国の首都を中心にして次第に周辺の地に解説が及んでゆき、やがて境を接する次の地の国都の記述に移行するという順序をとっている。編集に参加した弁機を始めとする僧たちは、玄奘の旅行ノオトの順に従つて諸国志をまとめて行つたため、わずか一年たらずの間では、正史の地理志のような形式をとる暇がなかつたのであらう。この風変りな方志は、直ちに太宗に献上された。おそらく、僧たちの間に筆写伝承され、多くの読者を得たであらう。

また關州(陝西省郿縣)の昭仁寺から玄奘のもとにはせ参じた綴文の大徳慧立は、偉大なる師の伝記を書き始めた。彼は玄奘の生い立ちから印度旅行と帰朝までを五巻にまとめ、永遠に後世に伝えるべく地下に埋めた。やがて年老い心労のため病氣になり、命短夕に迫つたとき、弟子に命じて掘り出させたが、出土しうになつたとき死んだ。その未完成の部分、すなわち、玄奘が帰国してから死去するまでの部分は、ひきついで彦棕が書いたといわれる。しかし、慧立はほぼ全体を書いており、彦棕はその排次補筆をしたものとも言われている。慧立もまた弁機と同様に玄奘の志記を利用できる立場にあつたし、「大唐西域記」を読むこともできた。しかし、何よりも直接師から聞いた話を書くことができたであらう。玄奘が旅行を決心するさいの二つの夢の話、インドにおいて帰国を決意するきっかけになつた夢の話などは、玄奘の口を通じてでなければ、到底知りえないことである。その他、沙漠や險難越えの苦勞、盜賊に襲われた時の心境描写もおそらく「志記」には記録されていなかった秘話だったのであらう。慧立の部分に較べて、彦棕の部分は、上奏文・碑文・議論文などの固い公式の文章が多く挿入され、前半の遊記ふうの伝記とは異つた様相を呈してくる。しかし、ともあれ、この伝記が初唐末期の人々

に与えた感動の大きさは想像に難くないのである。

玄奘が帰国して三年後、インドから王玄策が帰朝し、「中天竺国行記」⁽⁸⁾十巻を書いた。これは今伝わらない。ついで、高宗は使者を康国・吐火羅に分遣し、その地の風俗物産を図に描いて報告させた。そして、許敬宗に命じて全体の編集を行わせ、顯慶三年(六五八)に「西域国志」六十巻を完成させた。「遊仙窟」の作者張鷟の生まれるころには、こうした西方への知識が普及していたと思われる。

「遊仙窟」の書き出しによると、作者張鷟は、寧州(甘肃省寧県襄楽県尉から、河源道行軍總管記室の資格で、河源軍に奉仕したという。それが事実の記録とすると、その時期は儀鳳二年(六七七)から永隆元年(六八〇)の間に行なわれたであろう。彼は甘肃省の汧州(汧陽県隴州(隴県から金城(蘭州市)を通り、さらに鄯州(青海省樂都県から河源軍の基地(おそらく現在の西寧市附近)に赴いたのである。その地は、先年吐蕃と唐軍の激戦が行われた所である。儀鳳三年(六七八)に、李敬玄の率いる唐軍は、劍南道山南道の兵と、河南河北から徵募した猛士(勇敢な知識人)を合せた十八万の將士を擁していた。そして、秋七月、竜支において吐蕃軍を破り、西北進して青海(コノール)に至った。しかし、九月、吐蕃の大將論欽陵の襲撃を受けて大敗を喫し、工部尚書右衛大將軍彭城僖公劉審礼は捕虜となり、敬玄は命からがら鄯州に退却したのであった。「遊仙窟」の物語に登場する作者張文成(鷟)も、美しい主人公崔十娘、王五嫂も、共にこの戦闘と深い関連があったのである。

物語では、張文成はこの奉使の途中、險峻を越え、桃花の咲く岸辺で洗濯している少女に逢う。そして「金台銀闕」「梅梁桂棟」「水精の浮柱」「雲母の鎔窓」の金殿玉楼に招かれ、山海の肴膳と、この世ならぬ美女たちに歓待される。ところが、一方、彼女らの口から告白される境遇はまことに悲惨なものであった。十娘の独白によると、彼女は清河の崔氏の出身で、弘農の楊氏に嫁いだ者である。まさに名門同志の幸せな結婚のスタートであった。そして父や夫に従って、この河西の地に移住したのであった。一方、夫と兄は蜀生(意味不明)の侵入を防ぐため、筆を投じて従軍し、あえなく戦死した。かくて崔十娘は十七歳、兄嫁王五嫂は十九歳の若い戦争未亡人となってしまった。いわば、彼女たちは、この山峽の地へ軍事的移住した知識人の妻であり、大戦

の犠牲者だったのである。彼女等は今や頼るべき人を失い、ここに住むこと数年、「室宇荒涼、家途窮弊」した
 みじめな有様であると自陳している。

こうした場面設定上の矛盾混乱は、すぐれた作者であれば当然何らかの方法で解決したであらう。作者が下敷きとして用いた伝説を想像しながら、その処置を考えると、第一に考えられることは、劉晨と阮肇が天台山中に迷いこみ、二人の仙女に歓待されて半年間そこに過して帰ってきたら、その間に三百年もの歳月が過ぎていたという、あの天台淹留伝説のように、すべて仙界の事件としてしまい、仙女に現実性を与えない方法。第二に、作者牛僧孺自身が伊闕(洛陽市)の鳴臯山麓大安の民家に宿った夜、薄太后・戚夫人・王昭君・楊貴妃・潘妃・緑珠たち歴史上の美女に歓待され、その夜は王昭君と床を共にして翌朝辞去する「周秦行記」の物語のように、翌朝その場所を見たら廢墟であり、自分の見たのは夢と幻想であつたというぐあいに、幻想的場面にしてしまう方法。第三は、沈亜之の「秦夢記」、沈既濟の「枕中記」、李公佐の「南柯太守伝」のように、すべて夢の中の出来事にしてしまう方法。第四は、白行簡の「李娃伝」、蔣防の「霍小玉伝」のように、現実に長安の遊女との交歓の物語にする方法、などが考えられる。

以上の例の多くが、中・晩唐の小説で、作者の設定が整いすぎているとしたら、古く「高唐賦」「神女賦」「洛神賦」のように、神女と登場人物の交歓を、夢と幻想にしてしまう方法をとれば、すべてにおいてこうした矛盾は生じなかつたのである。

また南朝梁以後の作品と思われる無名氏の小説「八朝竊怪録」の「蕭綰」⁽¹⁰⁾の物語や、「蕭獄」⁽¹¹⁾の物語のように、主人公が美女と交会したあとに、その正体が巫山の神女だったり、季子廟の壁画の神女であつたというふうに神女化すれば解決する。読者は当然そのような世にも稀な美女の本質と現実の関連を納得せずにはいられないものだからである。

ところが、「遊仙窟」の場合、背景は神仙窟でありながら、登場人物は下級官人張文成と、いたましい戦争末亡人であつた。それでは、未亡人たちに夫を失つた悲嘆が述べられるかと思えば、彼女らは憂愁のかけらすらな

いのである。彼女らの没落した身の上と、親しげに男に接する行為は、中唐の小説「霍小玉伝」の遊女霍(鄭)小玉とその母淨持の關係に似ている。霍小玉は、王族霍王とその寵婢淨持との間に生まれた娘であったが、父の認知を得られぬまま、父の死後、霍王家を追われ、遊女に身を落した哀れな女であった。春を謳ぐことが罪惡でない世界、飲会を青春の特権として喜び、かつそれを芸術化しようとする意図を持つ作者、それが張鷟であり蔣防であった。しかし物語構成から觀察すると、張鷟は、十娘と同衾する場面を頂点として三十数個の小段を前提として配置しているのに対し、蔣防は交歡の場面を、男女の愛の断絶悲劇の前提の一段として置いて置いているにすぎない。すなわち、「遊仙窟」は單なる性的文学のほか何ものでもないのに対し、「霍小玉伝」は人間性を探究した深刻な愛の文学作品であったと言えるのである。

張鷟はなぜ十娘たちを長安や仙界に住まわせず、辺境河源道に置いたか。それは彼が「河源に使を奉じて行き、かつ帰った者である」という西遊の事実をあくまで忠実に主張したかったからである。それは彼が当時の西方辺境を美化し歛樂地として描こうと試みたことを意味する。そこには、玄奘以来の唐朝人の西方への憧憬が窺われると同時に、現実には、拡張政策の当然の帰結として、異民族との激闘、そこにかり出された猛士の死と妻たちの落魄を見ることができるのである。しかしこの時代の知識人の西方へのあこがれは、現実の悲惨さを上回っていた。玄奘が旅して発見した西域やインドは、戦乱による荒廢と、盜賊の横行と、多くの廢亡に帰した仏跡にすぎなかった。もちろん玄奘は努力して多くのものを獲て帰ったが、失望することはそれを上回ったようである。張鷟もまた、猛士の詔に応じ、河源で一旗揚げようと志した一人ではないか。そして現実の慘憺たる敗戦の跡を見、そこに生起した複雑な人間關係を體驗してもどつてきたのではないか、と私は考える。彼の「朝野僉載」に収められたこの敗戦に関する記事の一二はそれを語るように思われる。

「遊仙窟」は畢竟遊戯の文学である。物語に挿入された多くの贈答詩、詠物詩、当時流行の歌行体の詩編は、通俗的なものであると思われる。そして物語構成をそれらの詩と共に分析してみると、それは秘画を伴う画卷に記された物語だったのではないかと想像されるのである。

三 仏教・道教の隆盛と小説

則天武后が帝位につき、国号を周を改めた大事件に、僧侶が参加していたということはすでに有名である。當時武后に寵愛深かった内道場の僧懷義たちは「大雲經」をもち出して、武后即位が仏典に予言されていたことであると述べ、こうした大變事を正当づけた。その後も「宝雨經」を訳経して一層その論を裏づけた、という史実は、当時の仏教の異常さを物語るものである。武后は自分の都合のいいようにこうした偽濫僧に用いただけで、法蔵や義浄のような真の高僧に帰依しているから、当時の仏教界全体が混乱していたのではないと言うのが大方の見解である。

小説家の目はそういう社会にも一面冷静に光っていた。張鷟は「朝野僉載」において僧懷義の「非理」の行為を暴露批判しているし、武后に愛された妖妄人・婆羅門僧・道士を非難している。

道教は特に玄宗に尊崇せられたことは有名である。開元二十一年正月、家ごとに老子一本を蔵せしめる勅命が下った。開元二十九年には兩京諸州に老子（玄宗皇帝）廟を設け、崇玄宗を置き、老子、莊子、列子、文子を学ばせた。天寶十四年には、自ら老子に注し天下に頒布したこと等は、その著しい例である。そういう王室の宗教への熱誠が、人民に及ぼして、人々は信仰深く、小説の作者もその例外ではなかった。

盛唐前半期に生きた張鷟は、定命の思想、占者の言葉、夢の前兆、道士の九宮の法、相墓法などを信じていた。今日の眼で見れば全くの迷信と言わざるを得ないようなことを彼は誠心信仰するのである。また「紀聞」の著者牛肅も、涅槃經や一切經金剛經の功德を語り、地藏菩薩の靈驗を記し、高僧の伝記を記録したほか、神鬼妖怪の俗信をまじめに記録している。

僧の伝記の中には、極めて異常な説話を包含するものがある。「太平広記」巻八七・九八の異僧の項にはそうした説話が多く収められている。「太平広記」の編者は巻九〇までの四巻を、ほとんど「高僧伝」より資料を得

ているが、卷九一以降は主として唐の小説集から採録している。そのうち、盛唐期の小説集に関するものを一二列挙すると、例えば、北斉の「稠禪師」(卷九一・紀聞・朝野僉載)の物語は、次のような構成である。

① 北斉の稠禪師は、沙弥になったころ、仲間僧たちと角力をするといつも負け、なぐられるのを羞じ、仏殿に入つて金剛の足を抱いて力がつくように祈る。六日目になると金剛が現われ、鉢に盛った筋を禪師に食わせる。肉食を禁じられていたが、必死の思いで筋を食べた禪師には怪しい力がつき、仏殿を出て仲間の所にもどる。かつて彼を侮った人たちもその力に畏敬する。

② 禪師はのち林慮山(河南省林県)に壮麗な寺を建立し、数千人の僧を従えていた。北斉の文宣帝は怒つて数万騎の軍勢を率いて攻撃をしかける。禪師は自ら恭順の態で僧徒を率いて谷口に帝を出迎える。驚いた帝は、禪師に快力を見せて欲しいと頼む。禪師は「昔の私の力は人力にすぎません。いまは神力をお目にかけます」と言つて呪文を誦えると、寺院建立のために集積されていた数千本の材木が空中に舞い上り、入り乱れて落下したので、帝は叩頭して止めて欲しいと頼みこんだ。

③ 禪師は、後に并州で寺を建立している最中に病没した。臨終に「死んで大力長者になり、この仕事を完成させたい」と言い置く。三十年後、隋帝は并州を通り、この寺を完成させた。それで当時の人は帝を大力長者と言つた。

以上の三個の話根からこの伝記は成つていて、共に禪師が快力の持主であつたことを語っている。しかもその力は金剛から授けられたものであるというのがモチーフとなっている。

「旧唐書」卷四六経籍志雑伝の部に、「稠禪師伝」一卷の名が載せられている。作者は不明である。おそらくこの説話は、その「稠禪師伝」から摘出されたものであろう。

同じく「太平広記」卷九四所収の「儀光禪師」(紀聞)の逸話は、より一層感動的である。

① 儀光禪師は、則天武后に誅殺された瑯琊王の子であつた。武後の追求をのがれ、乳母に養われて八歳になつた禪師は、乳母に自分の生い立ちを聞き、涙ながらに別れる。

② たった一人になった禪師は、旅館で少年たちと遊んでいるところを、郡守夫人に認められ、五百錢を恵まれる。

③ 村野に投宿している時、一老僧にあう。老僧は禪師を桑の木の陰に導き、髪を剃り法衣を授ける。そして東北数里の先にある寺へ行くように命ずる。実はその老僧は聖像の化身だったのである。

④ 十年後、唐朝は再興し、瑯琊王の子孫の探索が始まる。禪師は自分こそその子孫であると申し出る。岐州の李太守は従父に当る人だったので、禪師を招いて自分の家に住まわせた。太守には娘があり、禪師を見染めて、百方手を尽して禪師に迫ってくる。困った禪師は娘をあざむいて、一室に入り、沐浴し、部屋を鎖してしまった。娘が窓から覗いてみると、剃刀を持った禪師が彼女の方をふりかえって「この根があるから欲情に逼られるのだ。これを除去したら、逼られはしない」と言うなり性器を削除してしまう。ようやく室内から救助され、手当てを受け、数月後に治癒する。

⑤ 太守から中宗に禪師のことが伝えられ、王族であることが認められると、自由に寺を立てることが勅許され、終南山の興法寺に住し、数千人の僧俗に譲られ、卿相にも尊崇された。禪師は将来を予言する力があつたので一層信仰されたのである。

⑥ 禪師は自分の死を予言し、開元二十三年に安らかに死んでゆく。柩が出ると異香が漂い、数百群の白鶴が天に舞った。現在葬所に天宝寺が建てられ、弟子がそれを守っている。

という六個の話根より成っている。王族でありながら不幸な少年時代を送った禪師が、一たん王族の身にもどると、女性の誘惑に迫られる。僧と王族の二者択一を迫られる時、禪師は敢然と自らの性器を断ち切って僧の道を選ぶ。この第四のプロットがこの物語のクライマックスである。いかにも仏教説話らしく禪師の固い受戒の態度が描かれているが、禪師を慕って迫ってゆく娘の描写も精細であって、ストーリーは生彩を放っている。

「太平広記」巻九五所収の「洪防禪師」(紀聞)の説話はさらに奇怪である。

① 洪防はある日鬼使の訪問を受け、鬼王の娘の病氣平癒の祝賀の修斎に招かれ、鬼国に赴き、五百絹の礼物

を得て帰る。

② 洪防の声望はますます高く、天人が現われ南天王提頭頼吒の依頼で、天国の供養に招待されることになる。天王の宮殿で法会が終ったあと、禁制を破って後園に行くと大銅柱に夜叉が縛られていた。洪防は夜叉に同情し、その言葉にだまされて、縛を解いてやる。天王は洪防の行為を戒める。まもなく山岳川瀆の神が王の庭前に現われ、夜叉が人を食って困っていると報告する。王は諸神に命じて夜叉を捕縛させ、その手足を斬り、鎖で腦を貫いて縛らせる。洪防は地上に帰ることを願い、前の二天人に送られて寺に帰ってくる。それはわずかな時間だったのに、寺では二七日間防の所在がわからなかったのである。

③ 洪防は陝州に竜光寺を造り、病房を建て、常に数百人の病人を収容した。

④ やがて天の釈提栢国から夜叉が使者として訪れ、帝釈天に大涅槃經を講ずることになる。洪防は善法堂に昇り、階上には数百万の諸天や四天王、階下に竜王夜叉鬼神非人などが合掌している中で、涅槃經を講じ、天帝に感謝される。また夜叉に送られ寺に帰ってくると、弟子たちは二七日間洪防の姿を見失っていたのであった。防は帰ってきてから、その善法堂の様子を二十四願の屏風に画かせたので、それを見る人たちは驚いた。

⑤ 防は天上から帰ってきた時、毛孔から光を発したが、地上の食物を食べてからその光も消え失せてしまった。則天武后は洪防を招き、屏風を取り、教えを乞うた。防は「殺戮をおやめなさい。さもないと果報を損いますよ」と申しあげた。それで墨勅を賜わり、どこでも仏寺を建立することを許された。防はやがて陝中で死んだ。

この五個のプロットは、洪防が鬼王と天王の所で法を講じて礼遇されることを語っている。特に二度にわたる天上界での法要の様子は詳細であって、天上界の諸天の關係、天界（又は鬼界）に赴くときの法などを記録している。これらの小さな要素はおそらく仏典や当時の仏教界の信仰をそのまま伝えたものと思われる。

特に興味深いことは、防が諸天に招かれた時には、熱心に法を説いたのに、則天武后の所へ赴いた時は数ヵ月

留まっていた間に、仕方なしにたった一言だけ武后に説いた、という最終話である。そこには仏教徒から政治に對する苦言が呈せられて見ると見るべきであらう。

以上三編は、いずれも傑出した僧の怪力、自制心、講經のすばらしさをそれぞれ物説っているものの、没時までを記録している所を見ると、本来僧伝の体裁を為していた説話の一部分と考えられる。そして、これらには共通して異常な事件が描かれ、仏教の尊崇が説かれている。特に洪防禪師の物語では、善法堂の事情を長く仏經を引用して説明していて、洪防の見た善法堂を讀者に深く印象づけようと試みている。これらの物語が六朝の「冥祥記」や、初唐の唐臨の「冥報記」の諸説話の延長にあるものであることは言うまでもない。

一方道士の物語について、「新唐書」芸文志には、

。張說、洪崖先生伝一卷（張氲先生、唐初人。）

。冲虚子胡慧超伝一卷（失名。慧超、高宗時道士。）

。潘尊師伝一卷（師正。）

。蔡尊師伝一卷（名南玉、字叔宝。宋祠部尚書郭士世孫。歷金部員外郎、棄官入道。大曆中卒。）

。劉谷神、葉法善伝二卷。

。正元師、謫仙崔少元伝二卷。

。陰日用、傅仙宗行記一卷（仙宗、開元資陽道士。）

など、初唐盛唐の道士の伝記が見える。しかしそれらは現在見ることの出来ないものである。例えば胡慧超とは、胡超僧という洪州の法術をなし神仙薬を作る人と思われる。「朝野僉載」（太平広記卷二八八「胡超僧」）には、則天に長生薬を献じ、多くの賞賜を受けたが、服薬後二年にして則天は崩じたと記されている。

葉法善は玄宗朝の道士であり、多くの説話集にその名に見える人物である。「広徳神異録」（太平広記卷七七「葉法善」）には、玄宗を道術で西涼州に案内して影燈を見物させたり、月宮に案内して天上の音楽を聞かせ霓裳羽衣曲を作らせた、と伝える。「広徳神異録」の撰者及び成立年代は不明であるが、おそらく中唐初期の作であらう。

「朝野僉載」(太平広記卷二八五「葉法善」)には、則天武后の内道場で、道士と僧が腕くらべをしたとき、玄都観の道士葉法善は、胡桃二升を殻ごと全部たべたり、真赤に焼いた鉄鉢を両手につかんで僧の頭に被らせようとしたという説話がある。やはり、葉法善のような道士も時代を経て次第に伝説化し、中唐初期に伝記にまとめられたものと思われる。「朝野僉載」の説話が比較的現実的であるのに対し、「広徳神異録」の場合は、いかにも伝説的であるからである。

初唐の唐臨や、張鷟が定命の思想を信じていたように、趙自勤もまた「人の運命は前もって定まったものである」という一種の運命論を信じていた。そして小説集「定命論(録)」十巻を書いた。「新唐書」芸文志によれば、趙自勤の「定命論」のあと、太和年間に呂道生という人が「定命録」二巻を書き、さらに、温翬が「続定命録」一巻を続けている。こういう思想が唐朝宮人の間に強かったかが想像される。

趙自勤は、天宝年間に左拾遺となり、天宝十二年(七五三)水部員外郎から、括州(浙江省麗水県)刺史に出されていたが、安祿山の乱により玄宗が成都に亡命すると、秘書監に一躍昇任した。その後乾元三年(七六〇)ころには蘇州・杭州あたりの役人に貶せられた。彼はこうした運命の激変を体験し、いよいよ「運命」の前定を考えずにはいられたらしい。

唐朝宮人が科擧合格やその後の立身出世にいかにかがれていたか、また、実力や努力ではどうにもならない官界の現実を諦観したり、夢や占者の言葉に希望を托していたかを、「定命論(録)」は語っている。いま「太平広記」から「定命録」の作品拾ってゆくと、定数の部に二十則、知人の部に四則、卜筮の部に四則、相の部に二十六則、夢の部に五則、巫の部に一則、再生の部に一則、計六十一則がある。そのうち三則は貞元以降の物語だから、呉道生の「定命録」との混乱かもしれないので除外して、五十八則が「定命録(論)」のすべてとなる。ともあれ、その大半を定数と相(人相見)の説話が占めており、人の運命を予知する能力を持つ人が異常に尊崇されていたことを示す。

例えば、「太平広記」卷二二四所収の「壳鯁媼」の物語は、馬周という落魄した男が、長安の壳鯁媼(むしもち

売りの女の紹介で中郎將常何之の食客になり、立身出世して宰相、吏部尚書となる話である。この馬周の運命を決定づけた嫗こそ、後の馬周の妻であり、むしろ売りだったところから、李淳風や袁天綱のような有名な人相見に、将来貴人になる人と折り紙をつけられていた女なのであった。いわば、嫗は馬周の将来を予知した女であって、彼女にめぐりあうことによって、馬周は宰相の位を獲得できたと、作者は考えたのである。

この物語は、「旧唐書」巻七四馬周伝にほとんどそっくり下敷きとして用いられている。ただし、むしろ売りの女のプロットは削られている。史伝の編者にとって、その部分はいかにも宰相の妻にふさわしくないと考慮したからであろう。

四 逸話集について

歴史的人物の行為の断片を記録する、いわゆる「志人小説」の流れは、晋の裴啓（三六二ころ）の「語林」、郭澄之の「郭子」、劉義慶（四〇三—四四四）の「世說新語」、沈約（四四一—五一三）の「俗說」、殷芸（四七一—五二九）の「小説」、侯白の「啓顏錄」を経て初唐期に入るが、初唐期には特にこれといった作品を見ずに終る。ようやく盛唐期に及んで、張鷟の「朝野僉載」が現われ、則天武后期、玄宗期の士人たちの逸話を記録し、その行為を批判するようになる。こうした小説における人物批判は、やはり新しい時代精神の現われであり、中唐期のいわゆる「伝奇小説」の作者の批判精神に発展してゆくものであると思われる。

また、やや遅れて盛唐後期には、「史通」の著者として有名な史官劉知幾（¹⁸字玄）の子劉餗が現われ、「伝記」「隋唐嘉話」などの逸話集を書いた。歴史的人物の言行を主とした多くの記録は、正史に採用されているものあり、エピソードを点綴して列伝を書くこうとする中国史官の好材料となったのである。また、その簡潔な叙事様式は後の中唐期の劉肅の「大唐新話」、李肇の「唐国史補」、のモデルになったと思われる。この項においては、その「伝記」「隋唐嘉話」について述べよう。

劉餗は、「旧唐書」卷一〇二劉子玄伝に伝がある。子玄の子(昉・餗・彙・秩・迅・迥)の一人として生まれた。父が經史の學に博通していた影響を受け、六人の子たちはそれぞれ學者として、高級官僚として名を馳せた。餗の兄昉は史官となり、「六經外伝」「統說苑」「太樂令壁記」「真人肘後方」「天官旧事」を書き、秩は「政典」「止戈記」「至德新議」「指要」を書き、迅は「六說」をそれぞれ書くという著述家の家系でもあった。餗は第二子として、右補闕・集賢殿學士修國史となり、史館に名を連ねた。そして、「史例」三卷、「伝記」三卷、「樂府古題解」一卷を著わしたと記されている。

一方、「新唐書」芸文志小説家類には、

劉餗「伝記」三卷(一作「国史異纂」)

とあり、同じく雜伝記類には、

劉餗「国朝伝記」三卷、「国朝旧事」四十卷。

と記録され、さらに「宋史」芸文志小説家類には、

劉餗「伝記」三卷、「隋唐佳話」一卷、「小説」三卷。

と記されるに至る。

これらを総合すると、「伝記」は「国史異纂」とも「国朝伝記」とも呼ばれたらしいこと、また別に宋代以後には「隋唐佳話」という小説にまとめられたことが想像される。現在、「伝記」「国史異纂」は一書として伝わらず、わずかに「太平広記」に「伝記」は十則、「国史異纂」は五十則収められるにすぎず、「国朝伝記」は「太平御覽」に十五則採録されているだけである。なおこの他に劉餗の作と見られる「国朝雜記」があり、「広記」に七則、「御覽」に一則採録されている。

一方、宋志に登場した「隋唐佳話」は、「隋唐嘉話」と名を改め、現在、「顧氏文房小説」本、「続百川学海」本、「說郛」本、「五朝小説」本、「唐代小説」本、「類說」本があり、一九五七年には、中国文学参考資料小叢書第一輯として古典文学出版社より、顧氏文房小説本を底本としたものが校印発行された。このうち収載説話の最

も多く、信頼できる資料は「顧氏文房小説」本及び古典文学出版社本なので、今はそれに従って論を進めることにしよう。

さて「隋唐嘉話」は現在見るところ上中下三巻にわかれており、かつその冒頭に序文がある。上巻は、隋より太宗に至る逸話、中巻は、太宗・高宗の逸話五八則を収め、下巻は、武后・中宗・玄宗のころおよび六朝の説話七二則を収めて、計一七〇則がそのすべての説話である。「国史異纂」をこれと比較検討すると、そのほとんどをこの中に発見することができ、しかもその文章はわずかに字句の差をみるのみである。すなわち、巻中に二七則、巻下に二一則、残り二則のみが不明で、巻上には全く含まれていない。

また「太平広記」所収の「伝記」を検討すると、巻六九「張雲客」・巻二〇一「房瑄」・巻二〇三「悉」・巻三一「蕭曠」・巻四五四「姚坤」はともに中唐以降の物語内容を示しているから除外されるべきであり、巻二〇四「漢中王瑀」・巻二〇五「李龜年」は不明であり、巻二三〇「蘇威」の説話一則だけが巻上に収められている。従って「太平広記」の「伝記」は他の書と混乱したものであると言えよう。

「太平御覧」所収の「国朝伝記」は十五則あるが、それらの逸話が「隋唐嘉話」と同一なのは、巻上に四則、巻中が六則、巻下が三則で、不明が二則である。従ってこの「国朝伝記」は、ほとんどが「隋唐嘉話」に収められたと考えてよいであろう。

また「太平広記」所収の「国朝雜記」という書の説話数は、わずか七則であるが、それらが「隋唐嘉話」に収められる状況は、巻中が六則、巻下が一則であり、うち一則是「朝野僉載」と共通の説話である。一方「太平御覧」の「国朝雜記」はわずか一則で、「広記」本所収以外の逸話であり、「隋唐嘉話」巻下に属する説話と同一である。

これらの説話を全体として比較して見ると、「国朝伝記」と「国朝雜記」の一致する場合、「国朝異纂」と「国朝伝記」と一致する場合などがあって、これらは文体から言っても、説話内容から言っても同類のものと考えられるのである。ただし「広記」所収の「伝記」は、多くの場合「伝奇」（裴鉶）の誤りではないかと思われるのを

除外する。

こうして現本「隋唐嘉話」は、「国史異纂」「国朝伝記」「国朝雜記」「伝記」を収録した逸話集であると思われるが、なお、宋代の一巻本とはどのようなものであったか、他の「伝記」(国史異纂)などは元来どんな内容であったかは、現在それらの完本が伝わらないので明らかではない。おそらく、現本「隋唐嘉話」のように、短く簡潔な文章の逸話集であったのであろう。その内容は、主として初唐・盛唐の皇帝・高級官僚・芸術家・名人などのエピソードを記したものである。

「国史異纂」を「広記」の分類に従ってその編数を見ると、方士一則、報応一則、徴応三則、名賢一則、知人一則、精察一則、器量三則、氏族二則、銓選一則、職官二則、權倖一則、博物二則、文章一則、才名二則、樂七則、書四則、画一則、奢侈一則、嘲諷一則、輕薄二則、妬婦二則、石一則、水一則、宝二則、木一則、草木一則、雜錄三則となる。これは怪事を記録することが少く、人物・博物に関する記事を多く収めるというこの集の性質を示しているのである。

また、「国史異纂」のうち十六則、「国朝雜記」のうち二則は、韋絢の「劉賓客嘉話錄」にも収録されている。おそらく、これらの話柄は、中唐の詩人劉禹錫の知るところとなり、彼の任地夔州¹⁹において歛談の材料になったのであろう。

五 むすび

盛唐期の小説は、以上のように多岐に亘っており、散佚して伝わらない作品も多いことは既に述べたとおりである。

ただ、この時代においては、「遊仙窟」のように、伝統的物語構成に基づいているとはいふものの明らかに虚構を意図した小説が誕生したこと、伝記的作品においても、僧伝の中には、行為の描写が詳細になり、扇情的な

ものが発生したこと、また、「紀聞」の「呉保安」の物語のように、儒教的（報恩）をテーマとし、やや複雑化した物語構成をもつ作品が出たことは、中唐のサスペンスに富み、儒教的イデオロギーをテーマとする作品へ伝奇小説への出現の前兆と見なしてよいであろう。すなわち、中唐期の小説の主なる要素は、すでにこの時代に揃いつつあったと考えてよいのである。

ただ、庶民の人間性の新鮮さに着眼する作者はまだ現われなかった。作者と人民との間にはまだ相当な懸隔があったと言わざるを得ない。そして、その空間は、安祿山の乱後に起った地方新興中小地主階級出身の新官僚たちによって、次第に埋められてゆくのを待たなければならぬ。また、文章の洗練と物語構成の巧緻、それに虚構性の補充も、ともに中唐期を待たねばならないのである。

この時期に属する作品のうち、「遊仙窟」「朝野僉載」「紀聞」「定命録」については拙著「隋唐小説研究」（昭和五十二年一月刊）に詳述したので、本稿では簡単にその特色についてのみふれた。なお、「隋唐嘉話」の詳細については、別に稿を改めて詳しく論じたいと思う。

——昭和五十一年十月十日——

- (1) 拙稿「初唐小説論」大東文化大学紀要十四号。昭和五十一年三月刊。
- (2) 「唐会要」卷三五経籍の項に、「（開元）七年九月勅。比来書籍欠亡、及多錯乱、良由簿歷不明。網維失錯、或須披閱、難可校尋。令麗正殿写四庫書。各於本庫每部為目錄。其有与四庫書名目不類者、依劉歆七略、排為七志。其經史子集、及人文集、以時代為先後、以品秩為次第。其三教珠英、既有欠落。宜依旧、隨文脩補。」とある。
- (3) 「全唐文」卷二五九。孫嘉之「对書史百家策」。
- (4) 「全唐文」卷二五九孫嘉之の項によると、嘉之は、河朔の人、天冊中、進士に合格、久視（七〇〇）年間拔萃科に合格、蜀州新津県主簿となり、開元二十七年（七三九）に卒した。
- (5) 「隋唐嘉話」序

述曰、余自髫髻之年、便多聞往説、不足備之大典、故繁之小説之末。昔漢文不敢更先帝約束而天下理康。若高宗拒乳母之言、近之矣。曹參挾吏、必於長者、懼其文書親焉。馬周上事、与曹參異乎。許高陽謂死命為不能、非言所也。釈教推

報応之理、余嘗存而不論。若解奉先之事、何其明著。友人天水趙良玉賭而告余。故書以記異。

(6) 「唐国史補」序

公羊伝曰、「所見異辭、所聞異辭」。未有不因見聞而備改実者。昔劉餗集小説、涉南北朝至開元、著為「伝記」。予自開元至長慶、撰国史補。慮史氏或闕則補之意、続「伝記」而有不为。言報応、叙鬼神、徵夢卜、近帷箔、悉去之。紀事、探物理、弁疑惑、示勸戒、採風俗、助談笑、則書之。

(7) 長沢和俊氏「玄奘法師西域紀行」三三八頁参照。

(8) 「新唐書」卷五八藝文志地理類。

(9) 「太平広記」卷六一。「藝文類聚」卷七。「太平御覧」卷九六七。「法苑珠林」卷三一。「古小説鈎沈」所収「幽明録」など参照。

(10) 「太平広記」卷二九六「蕭繇」の物語。南齊の太祖の族兄繇の子繇は、宋末大乱の時、江陵の明月峡に遊んだが、そこで神女に会い、一夜を過した。のち張景山にそのことを話すと、それは巫山の神女であると教えてくれる。繇は感激して詩を賦す。

(11) 「太平広記」卷二九六「蕭繇」の物語。齊の明帝の建武年間に、書生蕭繇は、毘陵(常州市)から延陵にゆく途中、李子廟の前で美女に会い、舟に誘つて酒宴を催す。その女は廟中の壁画の女神であった。

(12) 「太平広記」二五五所収「李敬玄」。拙稿「朝野僉載考」日本中国学会報第二五号参照。

(13) 拙著「隋唐小説研究」第三章第一節「遊記と遊仙窟について」参照。

(14) 滋野井恬氏「武周革命を翼賛せる二種の仏典について」(唐代仏教史論)参照。

(15) 「太平広記」卷二八八「薛懷義」。

(16) 唐臨の「冥報記」については拙著「隋唐小説研究」第二章第三節「唐臨と『冥報記』について」参照。

(17) 「宋史」藝文志に至ると「趙自勣定命録二卷」と記される。おそらく呂道生「定命録」と趙自勣「定命論」が合併してしまつたのではなからうか。

(18) 「旧唐書」卷一〇二附劉子玄伝付。「新唐書」卷一三二附劉子玄伝付。

(19) 卞孝宣「劉禹錫年譜」によれば、長慶元年(八二二)禹錫は夔州刺史に任ぜられ、二年正月着任した。「劉賓客嘉話録」の著者韋絢は、その年襄陽から、彼のもとに遊学した。そして、禹錫の周辺に在って、彼の談話を聞き、大中十年に及んで往事を回顧して、それを記録し「劉賓客嘉話録」を編した。

(20) 「紀聞」所収「吳保安」の物語は次の如くである。

(1) 郭元振の弟の子郭仲翔は姚州都督李蒙の判官となり、任地に赴く。呉保安は仲翔に手紙を書き、任用を願う。仲翔は李蒙に保安を推挙し、保安は管記に任ぜられることができた。

(2) 保安が姚州に着任する前に、李蒙は蛮地深く攻撃をかけ、あべこべに戦死、仲翔は捕虜となる。仲翔は保安に身の代金を都合して買ひもどして欲しいと手紙を書く。

(3) 保安は仲翔が推挙してくれた恩に感じ、妻子を犠牲にして家財を売り、不足分を稼ぎ出そうと儋州にゆき、十年家に帰らない。保安の妻子は生活に困り、夫の後を追う途中、姚州都督楊安居に逢い、救われる。楊は郡に着任すると、保安を捜して官庫の絹を与え、仲翔を買ひもどさせる。保安は楊の好意に感謝する。

(4) 仲翔は十五年ぶりに救出され、京に帰り、蔚州録事参軍から代州戸曹参軍となり、親族の喪があけてから、保安の恩に報いようとする。保安は方義尉から眉州彭山県丞となったが、任限が終ったあとも故郷に帰れず、妻と共にその地で死んで寺内に仮埋葬されていた。仲翔は彭山を訪い、保安夫妻を祀り、その骨を故郷の魏郡にもち帰った。そして保安の一子を養育する。さらに家財を投じて盛大な葬儀を行ない、喪の終ったあと嵐州長吏となったが、天宝十二年に保安の子に朱紱と官を譲り、保安の徳に報いた。

(5) 仲翔が蛮地の捕虜となっていた時、最初蛮首の奴隸であったが、何度か逃亡を企て、次第に苛酷な状況に置かれていた。保安は大金を使って、最初の蛮首から次第に行方をさぐり、ようやく捜しあてたのであった。以上のような物語構成で、その中には二通の駢文書簡を含む。(5)の話柄は(2)の補足となっている。